

書評 Xu Gouqi, China and the Great War : China 's Pursuit of a New National Identity and Internationalization

著者	川島 真
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	49
号	9
ページ	65-68
発行年	2008-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007231

Xu Guoqi,

*China and the Great War :
China's Pursuit of a New
National Identity and Inter-
nationalization.*

Cambridge : Cambridge University Press,
2005, xiv + 316pp.

かわしま しん
川島 真

I 中国外交史への新しい関心
——国際社会における中国——

従来、中国の外交史への関心は、「侵略と抵抗」の経緯におかれてきた。こうした外交史の物語は、国家や政権の正当性に深くかかわる近代史の説明とともにあった。アヘン戦争以来の相次ぐ戦争、そのたびに結ばれた敗戦条約、利権喪失の経緯、中国分割の経緯、そしてそれが回収されていく革命外交、戦争での勝利などといった経緯こそが、外交史研究の主たるテーマであった。また、国別の外交史では、ソ連や社会主義圏の国々との関係が肯定的に描かれ、西側の国とは政治外交的には批判的に、人民友好交流的部分では友好性を強調するような言論がとられた。これは、中国国内において「革命」や「帝国主義への抵抗」が正当性の源であったことや、対外関係のあり方に対応していた。

その後、中国が経済成長やナショナリズムを強調するようになると、租界への再評価や洋務運動における外国との経済面での協力などの研究が進み、そして国権回収運動のための国民外交などが研究され、さらには近代化が歴史叙述の主軸にすえられると、条約改正や外交制度の西欧化が研究対象となった。だが、多くの場合、近代化への努力を認めつつも限界があったという、「努力と限界」という枠組みで

説明されることが多かった。

そして、中国が国際社会にコミットし、国際政治において大きな役割を果たすようになると、中国が国際秩序といかに向き合い、また国際社会でいかに自らの考えを主張し、そこでどのような役割を担ったのかということに関心が向けられるようになった。このような研究でもまた、「努力と限界」的な説明がとられるが、多様な文書を使用することで中国外交を多面的に浮かび上がらせようとする傾向もある。こうした研究動向は、中国国内の外交史研究のみならず、欧文の研究において顕著にみられる。以下、その代表例を示そう。Craft (2004) は、中国外交文書やランシング文書などを駆使し、顧維鈞を中心に1910~30年代の中国外交を描いている。顧が国権回収を企図したものの、内戦と日本の侵略に阻止されたこと、1930年代には国際法に基づいた主張をおこなって日本の侵略を抑制しようとしたことなどが論じられる。また、国際連盟、国際連合と中国外交の関連も取り上げられ、顧が国際連合の組織過程において安全保障面での機能強化を主張して実現していくさまも描かれる。Elleman (2002) は、ウィルソン文書などを利用した、パリ講和会議における山東問題に関するモノグラフである。ウィルソンが中国に強い関心を示していたこととともに、中国のウィルソン主義に対する「誤解」こそが中国の政治に大きな影響を及ぼしたことを示す。Wang (2005) は、1842年から1946年までの中国をめぐる不平等条約を扱うが、興味深いのは、本書が単純な条約改正史ではなく、不平等条約をめぐる「記憶」が国民党や共産党など多様な政治主体によって創出される過程を描いているところにある。

このように、英語圏では、中国の外交文書に欧米諸国の外交文書を加え（残念ながら日本の外交文書はほとんど使用されない）、中国が国際法を援用しながら国際社会に適合しようとするさま、またそこにおける問題を扱おうとする研究が多くみられている。こうした研究は、Zhang (1991) のように1990年代の初頭にみられ、Kirby (1997) で見取り図が示されていたが、今世紀に入っていっそう本格化してきているという印象を受ける。これは、中国がこ

れから果たしてどのように国際社会で振舞っていくのか、という現在の関心に基づくものであろう。本書のモチーフも、このような流れのなかに位置づけることができると考えられる。

II 本書の内容とそのオリジナリティ

著者のXu Guoqiは、アメリカのKalamazoo Collegeの歴史学および東アジア研究の准教授である。南開大学を1987年に卒業し、同大学の講師を経て、修士からハーヴァード大学で学び、99年に歴史学の学位を取得している。指導教員は、入江昭教授である。また、本書のほかにも、同じく国際社会と中国というモチーフの下に描かれた、オリンピックと中国の関係を示すXu (2008) を刊行した、気鋭の国際関係史研究者、中国近代史研究者である。その問題関心は、中国の国際化にともなう文明の混淆、国際関係における中米関係などにおかれている。このような著者の問題関心のあり方が本書にも影響している。本書は「中国と第一次世界大戦」の関係を論じようとするが、このテーマ自体は決して新しいものではない。だが、これまでは山東問題の回収過程、あるいはパリ講和会議での努力と挫折が論じられることが多かった。それに対して、本書はそれを国際関係史全体から、また中国自身が国際政治の舞台にあらわれたことの国際政治へのインパクト、フィードバックを論じたものとなっている。これまでの先行研究の多くが中国の外交の歴史を論じているが、国際関係史全体に中国を位置づけていたわけではないだけにこのアプローチは新鮮だ。そして、昨今の中国の国際社会への登場が国際社会全体に与える影響を考察しようという目線がこのようなテーマ設定の背景にはあるものと思われる。

また、本書がマルチアーカイヴァル・アプローチを採り、中国の外交文書のほか英米仏独語の諸文書を使用していることも特記したい。それによって、当時における新外交、新たな国際社会の形成という状況と中国の観点が立体的に描かれることになる。

本書の構成は以下のとおりである。

序 論

第I部 準備された舞台

第1章 中国の国際システム参加への準備

第2章 中国の国際主義の高まりと新外交

第II部 中国の参戦の試み

第3章 戦争勃発に対する中国の反応

第4章 「労働者を戦士として使う」——中国の第三戦略——

第5章 3つの中国の公式参戦

第III部 中国の国内政治と外交関係における世界大戦

第6章 内なる戦い

第7章 1919年パリ講和会議と中国の新世界秩序の模索

結 論

本書の内容をみてみよう。全体は3部構成であり、第I部第1章、第2章では、中国自身が「新しい」国際社会に加わる条件を整えていく過程が述べられる。注意すべきは、本書はMowat (1968) に依拠し、1895年から1914年に国際社会は大きな転換を迎え、balance of world forcesへと時代が移ったという立場をとる点だ。本書で扱われる国際社会というのはその新しい時代のことである。だからこそ、中国の国際社会への適応や参加は総理衙門とか、19世紀後半の国際法の受容が問題になるのではなく、1905年の科举制度の廃止にともなう思想変容、また中国ナショナリズムの形成、中華民国の成立などが重要なものとされている。この点が、Hsu (1960) などとは異なる点である。

第II部第3章、第4章、第5章では、21箇条要求問題や山東問題への反発が強まる中国で、新たな国際秩序が中国に有利になるという観測の下、第一次世界大戦への参加が外交面、そして華工（中国人労働者）の欧州派遣などを通じて図られることが説明される。外交面でも、第一次大戦への参戦が、単に自国の国益というだけでなく、新たな国際秩序や極東平和の回復といった論点のなかで顧維鈞や梁啓超によって語られたことが示される。また、著者の主要研究テーマのひとつである華工について、その所期の目標が達成されたかという観点から、その挫折

を指摘する論考がみられるなか、本書では中国の新たな国際秩序での地位の獲得や国益の伸張に与えた影響を強調している。また、中国の大戦参加、新たな国際秩序への参加の否定的なアクターとして日本が描かれている点も特徴である。

第Ⅲ部第6章、第7章では、第一次世界大戦の参加問題や善後処理に関する国内での議論を整理し、そしてパリ講和会議において、中国社会に広がっていたウィルソン主義に基づく幻想が砕かれると、それによって五四運動がおきたり、あるいはあらたなユートピアや文明性を求める動きが生じたりしたとし、そこに中国における社会主義の受容をも見出そうとする。

結論では、本書が国際関係史のアプローチを採用し、第一次世界大戦からパリ講和会議へと至る過程で形成された新しい国際秩序と中国の間の相互関係を解明したことをあらためて主張する。すなわち、中国自身がこの新しい国際秩序に参加して国際化し、ある種の期待が裏切られつつも、多くの国家構想やアイデンティティが形成され、それが後の中国の歴史に大きな影響を与えたこと、またこのような中国の存在が新たな国際秩序にその新しさを加えたこと、また列強と中国の間に中独条約のような平等条約が生まれたことなどを指摘する。結論では、前述のZhang YongjinとBruce A. Ellemanの研究が同じ時期を扱う研究として紹介されるが、これらは山東問題やパリ講和会議それ自体に関心が向かっており、Great Warたる第一次世界大戦と中国の関係の全体像を把握しようとはしていない、としている。ここに本書のオリジナリティがあるのであろう。

Ⅲ 批評と討論

本書の大きな意義は、第1に中国(外交)史の領域と国際関係史の領域を結びつけた点にある。すなわち、1910年代からの新外交といわれた新たな国際秩序を、単に秘密外交への反発と捉えたり、ウィルソン主義が理想主義的すぎて結局は実現しなかったなどというように単純化するのではなく、中国のような国の国際化をうながし、新たな歴史を切り開い

た場を提供したのとして再評価し、同時に世界の国際関係においても、中国の存在があったからこそ、単なる列強の利害調整だけではない、新たな国際秩序が生まれたとするのである。この相互補完性が本書のひとつのモチーフである。もちろん、これは同時にこれまでの中国近代史の記憶や叙述への批判ともなり、また第一次大戦前後に議論されたいわゆる新外交、新国際秩序に対する再評価にもつながる論点である。そうした意味で、本書の視線は国際連盟を中国などの列強ではなかった国々、非常任理事国となろうとする国々の目線から再評価しようとする研究動向にも通じるものである。

第2に、中国にとってGreat Warだったとされた第一次世界大戦そのものもった特質、すなわち中国などの国々が新たな世界秩序の形成に希望を託して参戦することによって、それが「世界大戦」となっていくことを指摘した点も看過してはならない。そうでなければ、第一次世界大戦は単に列強だけをアクターとする戦争になっただろう。もちろん、パワーゲームは列強の間でほとんどなされたのだが、それだけで第一次世界大戦史は語れないというのである。これは、これまでの国際関係史、国際政治史において忘れられた物語であった。

第3に、中国と国際社会との関係を論じる場合、19世紀後半の主権国家間関係としてのウェストファリア体制とのかかわりが取り上げられることが多いが、本書ではそれを1910年代の新しい国際秩序形成への参加に求めた点である。これは、中国における国際社会へのコミットの度合い、その積極的な参加という点で重要な指摘であり、またそうしたアクターの参加を促した点で、その国際秩序には「新しさ」があったのだと考えられる。

第4に、この時期の中国外交について、一国史的な中国外交史では、国権の回収や国際会議で自己主張をしたものの、その目標は達成されなかったという「努力と限界」論で説明されがちであるが、それを中国国内における言論などとともに総体的に考察することで、アイデンティティや文明像に大きな転換がもたらされた時期と説明した点である。またその結果として新民主主義史観で近代と現代の時代区

分の分岐点とされる1919年の意義を、中国の国際化と世界観、自画像の変容の画期として捉えなおした点も重要だ。これは、中国の近現代史をウェスタンインパクト論や過度の内発的発展論で語ることなく、国際社会の変容とのインターアクションによって描こうとするものであり、台湾の唐（1998）にも通じる論点である。

このように、本書には多くの意義と可能性があるのだが、いくつか不安を感じる点もある。根本的な問題は実証部分である。特に第2部での日本側の対応に関する部分だ。本書では日本側の動向をイギリス側の文書で説明する傾向にある。そして、中国の国際化、新国際秩序への中国の参加に対する否定的なアクターとして日本が位置づけられている。果たしてそのように単純化できるのであろうか。本書では、新国際秩序を英米仏などの欧米列強の形成する世界と位置づけ、日本は利害関係によってやむなくその秩序に関連付けられている存在とされる。日本側の政策や意図を説明するのであれば、せめて日本語の先行研究による裏打ちが必要であるが、研究史がトレースされている様子はない。また、中国史に関する部分でも、（詳細ではあるが）年表である郭（1979）が引用されながら事実関係が叙述される部分が少なからずある。

議論の面でも、中国におけるアイデンティティや国家構想などの政治思想と現実の外交政策がともに叙述されるが、両者の関係について詳細に検討されるというよりも、平行されて説明される傾向にある。中国の外交官たちも、そういった政治思想の潮流と同様に傾向をもっていると考えていいのだろうか。このあたり第一次世界大戦やパリ講和会議をめぐる外交、それをめぐる国内での議論をいかに繋げて論じるのかという点での糊代が求められるところであり、本書における科挙の廃止に対する注目とも関連する。これは確かに知識人に大きな影響を与えたのかもしれないが、それにとまなう知識人の意識のあり方と対外政策が関係するかしなないかについては、いっそう議論する必要があるように思う。

紙幅の都合で多くは論じられないが、これらの諸

問題があるにしても、本書はこれまでの中国外交史研究などの陥っていた問題から引き上げ、議論をより大きな枠組みの下におこなったという点で注目に値する一書であろう。なお、本書は2008年に中国語版が出版される予定だとのことである。

文献リスト

<英語文献>

- Craft, Stephen G. 2004. *V. K. Wellington Koo and the Emergence of Modern China*. Lexington: The University Press of Kentucky.
- Elleman, Bruce A. 2002. *Wilson and China: A Revised History of the Shandong Question*. Armonk, N.Y.: M. E. Sharpe.
- Hsu, Immanuel C.Y. 1960. *China's Entrance into the Family of Nations: The Diplomatic phase, 1858-1880*. Cambridge: Harvard University Press.
- Kirby, William C. 1997. "The Internationalization of China: Foreign Relations at Home and Abroad in the Republic Era." *China Quarterly* 150(June).
- Mowat, Charles L. ed. 1968. *The New Cambridge Modern History Vol.XII*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wang, Dong 2005. *China's Unequal Treaties: Narrating National History*. Lanham: Lexington Books.
- Xu, Guoqi 2008. *Olympic Dreams: China and Sports, 1895-2008*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Zhang, Yongjin 1991. *China in the International System, 1918-20: The Middle Kingdom at the Periphery*. London: Macmillan Press Ltd.

<中国語文献>

- 郭廷以編 1979.『中華民國史事日誌』台北 中央研究院近代史研究所。
- 唐啓華 1998.『北京政府与国際連盟——1919-1928——』台北 東大図書公司。

（東京大学大学院総合文化研究科准教授）